入門期の教材と扱い方

木　村　宗　男

ま　え　お　き

〔1〕 近代語を外国語として教えるばあい，音声言語による意思伝達の訓練から始めることを正統とする考えは，こんにちでは一般的なものとなっている。

〔2〕 戦前でも日本人によって行なわれた日本語教育では，内地・外地を問わず，音声言語の修得を学習の基礎とした。

〔3〕 戦後，いろいろの理由から日本語を学ぼうとする外国人が多くなり，また，専門的な日本研究の領域でもフィールド・ワークを重視するようになったなどのため，音声言語としての日本語教材への要求が高まってきた。

〔4〕 これに応じて，国内，国外で大小無数の日本語教材が出版され，その後も数多くの教材作成が進行中である。

〔5〕 ことに米国では，戦後著しく発達した構造言語学を指導理論とする音声言語教材がいくつか作成され，いま進行中のものも多い。(教材書目参照)

〔6〕 これまでも，日本語の会話指導書と銘打ったものが，内・外人によって，多数出版されたが，口語文法の解説書の域を出ないものか，いわゆる日常会話を話題によって分類したにすぎないものかであった。

〔7〕 新しい日本語教科書は，日本語の構造を音声・文法・語彙・語法などの角度から記述言語学的に分析して得た資料と，語彙調査に基づいて選んだ基礎語彙とを，口頭指導に適するように配列し，それに豊富な練習

用材料を加えて作成されるので，構成・配列の点でも古いものとは著しく異なる。

〔8〕 当語学教育研究所でもこのような手順で，早稲田大学に在学する外国学生用の教科書を作成中である。現在までに形になったものは講習期間中教材展示室に出してある。

〔8〕 このような新しい構成配列が明瞭に見られる既刊教科書の中，日本語教育の分野で，何かと話題になることの多い 5 種の教科書を取り上げて入門期の教材のあり方と扱い方を調べてみる。国際学友会の入門用教科書 Nihongo no Hanasikata も広く使われており，取り上げたいが，短い時間に話をまとめる必要上，比較の容易な下記 5 種にかぎることにした。

1. Naoe Naganuma, *BASIC JAPANES COURSE*, 1950
   (以下 Naganuma とする)
2. Samuel E. Martin, *ESSENTIAL JAPANESE*, 1954
   (以下 Martin とする)
3. Eleanor Harz Jorden, *BEGINNING JAPANESE*, 1962
   (以下 Jorden とする)
4. 国際基督教大学日本語科 *MODERN JAPANESE FOR UNIVERSITY STUDENTS*, Part I. 1963 (以下 ICU とする)
5. John Young and Kimiko Nakajima, *LEARN JAPANESE*, 1964
   (以下 Young とする)

各教科書の構成

I 本 文

〔1〕 Naganuma

Main Text 全 50 課。ヘボン式ローマ字。英訳なし。本文中の単語 1072。課によって問答・叙述・物語などがある。別に，本文と関係なく

暗記すべき短文 Conversational Expressions (和・英) が各課に 5 題ずつ割り当てられて，本文を補う。週 15 時間で 14 週間が標準速度。

〔2〕 Martin

Basic Sentences 全 10 課。ヘボン式ローマ字。アクセント記号つき。和英対照。構造分析は Bernard Bloch に従い，語彙よりも構造を主眼として編んだ。金田一京助明解国語辞典，NHK アクセント辞典を参考とした。週 10～15 時間で 10 週分の内容。

〔3〕 Jorden

Basic Dialogues: For Memorization が本文。Part 1, 20 課，Part 2, 15 課。ローマ字つづりは訓令式に近い。長音は母音を重ねて表わす。アクセント記号つき。アクセント表記は徹底していて，本書中のあらゆる日本語に一語も余すところなくアクセント記号をつけている。英文を左に和文を右に並べて，まず英文で意味を知ってから日本文を読むようになっている。すべて日本語について分析的に解説して，わからせてから覚えさせるという Jorden のやり方の現われである。各課を完全にマスターしてから次へ進むことを強調し，何時間で終えるか標準を示していない。他の書とちがって，本文はすべて会話の形式で分量はいちばん多い。語数概算 2,000.

〔4〕 ICU

ふつう各課のはじめに置く本文はない。課の終わりに Conversation (20 課まではローマ字) と Reading and Writing (1 課からひらがなと漢字) がある。5 種のうち 1 課から文字を教えるのは本書だけ。全 40 課で漢字は 400。各課を 4 時間の授業で終えるとしているが，学生がよほど勉強しないとむずかしい。ローマ字つづりは独自の発音式で，ち・つ・んはそれぞれ ci・cu・N で，長音は母音を重ねて表わす。無声化

母音を斜線で示す。すべての文の英訳と漢字まじりひらがな文のローマ字による読み方がページのうらにある。日本文と英文を並べて見せない。

〔5〕 Young

本文は Dialogue で 4 巻通じて会話の形式だが，II 巻以後は Dialogue の前に Presentation として短い説明文がつく。I 巻ではこの位置に Useful Expressions が来る。I 巻は修正ヘボン式で，アクセントとイントネーションを示す。II 巻以後ひらがなと漢字を使う。本文と向い合うページは必ずさし絵になっていて単調さを破る。活字の大きさ，字体，組み方にも工夫が見られる。本文の英訳は巻末の付録に納めている。

II 文　型

〔1〕 Naganuma

数式化されたパターンは示さないが，Basic Sentences として，本文から抜き出した基本文章を並べ，和英対照で示す。

〔2〕 Martin

特に文型としてまとめた部分はない。文法の解説中必要に応じてパターンを使う。

〔3〕 Jorden

文型という名でまとめた部分はない。パターンもどこにも見当たらない。パターンを示さないで，徹底的反覆練習によって実質的な文型を植えつけることを教師に要求しているとみえる。

〔4〕 ICU

その課で扱う文型の文法要素を数式化したパターンを各課のはじめに

出す。パターンを強調する著者の考えが端的に示されている。

〔5〕 Young

Pattern Sentences として，パターンと例文を1語1語対照して示す。巻末にもう一度各課のパターンをまとめて出している。

パターンは文型を強く印象づける働きをする。教科書にパターンがないときは，教師がつくって与えることも効果がある。

III 語 句 の 訳

各課の新語を取り出して，アクセント記号をつけ，外国語訳を与え，必要に応じて意味範囲・用法上の注意を与える。日本語と外国語の意味・用法が完全に対応するものは実際にはあまりないから，外国訳というものはほんの理解のための手がかりにすぎない。教科書中に示された外国語訳を教師はひとつひとつ検討する必要がある。

〔1〕 Naganuma

別冊 GRAMMAR AND GLOSSARY で新出順に英訳を示す。

〔2〕 Martin

Volabulary Items として本文の次に置き，品詞別に分類する。

〔3〕 Jorden

Basic Dialogue の個々の文の前に，その文中の新語句を抜き出して，英和対照で示す点が他と変っている。

Notes on the Basic Dialogue は本文のあとで，新語句のうち特に意味・用法の注意を要するものについて，くわしく説明する。

[4] ICU

Vocabulary を文法解説のあとに置き，つぎに来る Pattern Practice, Conversation, Reading and Writing 中の新語を提出し，品詞別に分類する。語数 1,200。

[5] Young

New Vocabulary を文法解説のあとに置く。活用語は本文に出た活用形のまま示し，接続する助動詞・助詞をカッコで包む。訳を示すのみ。説明を要するものは次の Notes にまわす。

IV 文　　法

[1] Naganuma

別冊 GRAMMAR AND GLOSSARY 中の Gammar and Construction。文法に深入りしないで，学習者に分かりやすく書いてあるが，それでも自国語の文法にさえ弱い者はむずかしいという。

[2] Martin

Structure Notes といって，文法ということばを使っていないが，文法の解説にこの書の大部分のページを使っている。第7課では 47 ページに及ぶ。ある項目についてくわしいというより，解説の範囲が広い。例文も十分に与えて，本文を補っているが，それならやはり本文に織り込んで出すべきだろう。とかく文法的な解説は一般の学習者に敬遠されやすい。

[3] Jorden

Grammatical Notes　文法の解説は5種のうちいちばん詳しい。例文や表も多い。大判に小さい活字で 10 ページ以上にわたることもある。前書きによると，言語学的素養のない tutor は解説をしてはいけない，

本書の解説または専門の linguist にまかせよとある。アメリカの日本語授業では，linguist と informant が分担して授業を行なうところが，しばしばある。専門の linguist のみが解説を受け持ち，informant または drill master は教材に与えられた練習を忠実に行なうことのみを要求され，決して解説をしてはならないとされている。

〔4〕 ICU

Grammar は文型の次にあって，比較的簡潔。解説というより覚え書きのようなもので，教師に人を得れば，これで十分と言える。

〔5〕 Young

Notes で文法を扱うとともに，New Vocabulary の訳だけで足りないものを補う．文法という項目を特に避けたとみえる。

各教科書とも，文法の解説は教室外で学習者が自習自得すべきものとしているが，言語専攻者は別として，学習者が文法の解説を読んで十分に理解することはあまり期待できない。授業中に文法の解説をしないで文法事項を会得させるような練習が必要である。特に文法に興味を持ち，よく研究する者も時にはあるが，そういう者にこそ普通以上の練習量が必要であである。

V 練　　習

入門期の授業は練習に始まり練習に終わると言ってさしつかえない。各教科書とも練習に最も力を入れている。

〔1〕 Naganuma

別冊 Substitution Tables があり各課にかなりの量の口頭練習を与えるが，方法としては単調。Basic Sentences のカッコの中の語句を変え

て文を言わせる文型練習，別冊 Practice Book 中の Pronunciation Exercise（第7課まで），Composion Exercise などで変化のある練習ができる。この教科書は能力のある教師の活躍する余地を残している。その点 Jorden とは対照的。別冊の練習帳で宿題を多量に与える。

〔2〕 Martin

Exercise があるが分量は少ない。教師が練習を補わないと足りない。

〔3〕 Jorden

Substitution Drill, Response Drill, Grammar Drill, Expansion Drill, Level Drill.

〔4〕 ICU

Pattern Practice, Recitation of Conversation, Work Book.

〔5〕 Young

Pronunciation Practice（巻 I のみ），Pattern Drill, Substitution Drill, Expansion Drill, Transformation Drill, Response Drill, Mixed Drill, Combination Drill, E-J Drill, Review Drill, Exercise と種類が多く練習の変化に富む。

教科書中に印刷されている練習は，授業中にただ教師のあとをつけて言わせるだけではいけない。本をとじたまま正しい発音で言わせ，自習のとき，暗唱するまで練習させ，次回の授業でもう一度繰り返えす。できなければ何回でも繰り返えす。その上で，問答や会話に使って練習する。発音の矯正も忘れてはならない。

VI 聞き取り

〔1〕 Naganuma

Practice Book の中にある。

〔2〕 Martin

Comprehension (J のみ).

〔3〕 Jorden

Supplementary Material (J), *Supplementary* Telephone Conversation (E-J), Short Supplementary Dialogue (J), Question Supplementary (J), Greetings, Farewells and Assorted Small Talks (E-J) など，課によって，その中のいくつかを載せている。

〔4〕 ICU

Informal Conversation (J-E).

〔5〕 Young

復習とテストの課に聞き取りの問題がある。

聞き取りは単に聞かせるばかりでなく，内容の把握を確かめなくてはならない。その方法には，問答，口問筆答，筆問筆答，動作で表わす，内容の要約を話させるなどの方法がある。

VII テープ

音声言語の学習であるからには，自習にテープやレコードなど音の出るものを使うことが望ましい。教師の声を聞きながら自分も録音出来る型のレコーダーならいっそう効果的である。

〔1〕 Naganuma

Basic Course, Substitution Tables.

〔3〕 Jorden

Basic Dialogue, Drills, Supplementary Materials.

〔4〕 ICU

Pattern Practice, Conversation.

VIII 復習とテスト

〔5〕 Review Lessons 各巻 2 課, Exercise and Sample Test 各巻末 1 課を当て，全体から見て，かなりの量を取っていることになる。

テストの方法・問題・間隔などは学習効果と密接な関係がある。問題の種類・ねらい・形式など，Young のものが参考となる。

IX 文　　字

〔1〕 Naganuma

入門期の終わりごろから，Practice Book によってひらがなの練習をはじめる。50 課が終わるとすぐ長沼直兄標準日本語読本巻 I にはいるが，この本の第 1 部はローマ字で習った 50 課の本文をひらがなカタカナと漢字 200 字を使って表記したもの。ここまでを入門期と考えることもできる。ふつう 40～60 時間でこの第 1 部を終える。文字の筆順，読み(音・訓とも)，由来，熟語などを示した別冊漢字帳が各巻に付属する。

〔2〕 Martin

ひらがなを習うなら 6 課を終えてからとし，8 課を終えて上記の標準日本語読本で文字の学習を始めることができるとしている。ひらがな学

習用の教材として，Gardner and Martin, An Introductien to Modern Japanese Orthography—I. Kana を推している。

〔3〕 Jorden

文字は本書の Part I, Part II を完了してから，Chaplin and Martin, A Manual of Japanese Writing について学ぶようすすめている。

〔4〕 ICU

第 1 課にはいる前に，発音とともに，ひらがなをマスターすることを要求している。第 1 課から漢字を教える。別冊漢字表に筆順を示し，書き方の練習を与えている。

〔5〕 Young

巻 II から文字を教える．各課の New Kanji で，新出漢字の読み，意味，由来，筆順，用例を示す。漢字数は 309。

上記のように，文字を教えはじめる時期については各著者それぞれ意見を異にする。著者の日本語文字についての認識の相違によって意見が大きく分かれる問題だが，学習者の条件，学習の目標，教師の条件，教育環境，教育期間などを無視して決定することはできない。漢字の能率的な，系統的な教授法も研究する余地がある。

早稲田大学の日本語教育では，入門の第 1 課から，ローマ字をいっさい使わないで，ふつうの日本語表記で書いた教材を与えている。ローマ字の使用によって，せっかく耳から覚えた正しい発音がくずれてしまうのを避けるためである。実際の授業では，個々の課をまず音声言語として扱って練習し，そのあと文字の読み書きにはいっていく。

ま　と　め

以上見てきた 5 教材には，それぞれ巻頭に Introduction があって，その教科書の使用法，学習者の心得，教師への注意などが述べられている。Jorden のが最も長く，29 ページを占め，そのうち 25 ページは発音についての詳細な記述に当てられている。おのおのの著書が述べていることは，ほぼ共通している。それに私見を加えて，入門期教材の扱い方として，つぎのことをあげておく。これらは，他の教材を扱うときにも，そのままあてはまることである。

〔1〕 日本語学習の基礎は，音声言語によって日本人と意思を伝え合う言語習慣を体得することにある。

〔2〕 したがって，日本人のふつう話している日本語を，ふつうの速度で理解し，表現するように訓練する。

〔3〕 授業中はもちろん，授業以外のときも教師が日本語以外の言語を使って話すことは避ける。

〔4〕 基本文型の反覆練習と，文型の結合・延長によって日本語の理解と表現の能力を得させることに重点をおく。

〔5〕 授業中は教科書を開かせないで，できるだけ耳で聞いて理解し，口で表現する訓練を行なう。

〔6〕 語句の意味，文法の解説は学生が自習するものとし，授業ではもっぱら練習に専念する。

〔7〕 授業では日本語についての解説を与えるよりも，場面・情況の設定によって語句の意味・用法を会得させるようにする。

〔8〕 日本語と母国語の間に相似を求めさせないで，相違点を学ばせる.

〔9〕 教具・テープ・フラッシュカード・絵・実物・模型などを十分に用意して，音声言語のみによる学習の単調化を避ける。

〔10〕 教科書の足りない材料を補うように，例文などを工夫し，用意しておく。

日本語教材書目

（主として入門期に関係のあるものから選んだ。英語以外の外国語によるものは省いた。）

1) H. J. Weintz; *Japanese Grammar*, Hirschfeld Brothers, London, 1904.

2) Arthur Rose-Innes; *Conversational Japanese for Beginners, Japanese Reading for Beginners* Vols I～V; *Beginners' Dictionary of Chinese-Japanese Characters and Compounds*, Yoshikawa, Yokohama, 1916.

3) William M. McGovern; *Colloquial Japanese*, Trubner, London.

4) Joseph K. Yamagiwa; *Modern Conversational Japanese*, McGraw-Hill Book Co. 1942.

5) Serge Elisséeff and Edwin O. Reischauer; *Elementary Japanese for College Students*, Harvard Univ. Press, 1944.

6) Bernard Bloch and Eleanor Harz Jorden; *Spoken Japanese*, Yale Univ. Press.

7) Naoe Naganuma; *Basic Japanese Course*, Grammar and Glossary, Substitution Tables, Practice Book Parts I & II, 長風社, 1950.

8) 長沼直兄： 再訂標準日本語読本, Word Book, Kanji Book (以上巻 VIII まで) Practice Book (巻 III まで), 長風社, 1950.

9) Elizabeth F. Gardner and Samuel E. Martin; *An Introduction to Modern Japanese Orthography*—I. Kana, Institute of Far Eastern Languages, Yale University, 1952.

10) ルーテル日本語学校：日本語, 巻 I, II. ルーテル教団 1954, 1963.

11) Samuel E. Martin; *Essential Japanese*, Tuttle, 1954.

12) 国際学友会日本語学校： *Nihongo no Hanasikata*, 1954. よみかた, 1959, 日本語読本・改訂版 1957(巻 Vまで既刊) 国際学友会。

13) Yamagiwa and Shohara: *Spoken Japanese*, Univ. of Michigan.

14) Mieko Shimizu Han; *Modern Japanese*, 1961, *Intermediate Modern Japanese*, 1963; *Workbook in Modern Japanese*, 1963; *Advanced Japanese*, Mikado Publishing Co., Los Angeles.

15) Eleanor Harz Jorden; *Beginning Japanese* Parts I & II, Yale Univ. Press, 1962.

16) Ichiro Shirato; *The Living Language Course, Japanese*, Crown, 1962, *Conversation Manual: Japanese Common Usage Dictionary*, Four L. P. Records.

17) Roy Andrew Miller; *A Japanese Reader: Graded Lessons in the Modern Language*, (現代日本文読本) Tuttle, 1962.

18) Naoe Naganuma and Kiyoshi Mori; *Practical Japanese*, 長風社, 1962; four L. P. Records.

19) Andrew Nathaniel Nelson; *Japanese-English Character Dictionary*, Tuttle, 1962.

20) 小川芳男, 佐藤純一, 日本語4週間, 大学書林 1963.

21) Japanese Department, I. C. U.; *Modern Japanese for University Students Part I*, 1963. Part II, Part III 1965.

22) C. J. Dunn and S. Yanada: *Teach Yourself Japanese*, English University Press.

23) P. G. O'Neil and S. Yanada; *An Introduction to Written Japanese*, English University Press, London, 1963.

24) Hamako Ito Chaplin and Samuel Martin; *A Manual of Japanese writing*.

25) John Young and Kimiko Nakajima, *Learn Japanese:* Vols I~IV. Tokyo, Univ. of Maryland, 1964.

26) Tamako Niwa and Mayako Matsuda: *Basic Japanese for College Students*, Univ. of Washington Press, Seattle, 1964.

27) Junji Miura; *Practical Spoken Japanese*, 5 phonosheets, 三省堂 1964.

28) Howard Hibbett and Gen Itasaka: *Modern Japanese: A Basic Reader*, (日本現代文読本) Harvard Univ. Press, 1965.